

『平家幻想』

アーツカウンシル東京令和3年度「伝統芸能体験活動助成」

「伝統楽器にはじめてふれて一曲仕上げる！」

任意団体 てんらい

<p>(1) 祇園精舎</p>	<p>祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。 娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。 おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。 たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。</p>
<p>(2) 仏御前</p>	<p>《源平両家を陰で操っていた後白河法皇は今様を好み、乙前という遊女を師として自らも歌っていた》</p> <p>祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。 娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理なり</p> <p>《平清盛も今様を好んでいた。最初は祇王、祇女という白拍子を寵愛していたが、やがて、新しい今様を謡い舞う白拍子、仏御前を寵愛するようになった》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 仏は常にいませども うつつならぬぞあはれなる 人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ ● 遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生れけん 遊ぶ子供の声聞けば わが身さへこそゆるがるれ
<p>(3) 橋合戦</p> <p>(a) 橋桁三間</p>	<p>《わがまま放題の平家一門。驕る平家を討つべく追討の宣旨を最初に出したのは以仁王、高倉の宮であった。以仁王は、源頼政らとともに平家追討の計画を進め、日本国中の源氏に「平家を討て」という宣旨を送った。しかし、それが届く前に平家に知られることになってしまった。平家は宮をとらえるべく軍勢を送った》</p> <p>高倉宮は、宇治と三井寺との間で、六度までも落馬なされた。これは昨夜おやすみになれなかったからだ。そこで平等院にお入れして、しばらくご休息になった。そのとき、宇治橋の橋板を三間とりはずした。</p>

(b) 但馬	<p>平家の方にはこれを聞き 「すはや、宮こそ南都へ落ちさせ給ふなれ。追つかけて討ち奉れ」 その勢二万八千余騎、木幡山うち越えて、宇治橋の爪にぞ押し寄せたる。 敵が平等院にいると見た平家は、関をつくる。 「えいえいおー、えいえいおー、えいえいおー！」 宮の御方にも同じく関の声をあげた。 「えいえいおー、えいえいおー、えいえいおー！」 平家の軍勢は平等院を目掛けて、すさまじい勢いで宇治橋を渡り始めた。が、先に進んでいた先陣は、橋桁が外されていることに気がついた。 「橋を引いたぞ、過ちすな。橋を引いたぞ、過ちすな。」 しかし、あとに続く後陣はこれを聞きつけず、我先にと進んだので、前にいた先陣二百余騎は橋から押し落とされ、水に溺れてしまった。</p> <p>平家は橋を渡ることを諦めた。 源平両軍は橋の両方の爪にうつ立つて矢合はをはじめた。 ここに五智院但馬という僧兵がいた。平家は彼に向かって弓を射る。</p> <p>但馬「ここに五智院但馬、 大長刀の鞘をはづいて、ただ一人 橋の上にぞ進んだる。 平家「平家の方にはこれを見て、 あれ射とれや、射とれやとて、 屈強の弓の上手どもが 差しつめ引きつめ散々に射る。 平家「差しつめ引きつめ散々に射る。 但馬「但馬少しも騒がず、 平家「上がる矢をば 但馬「ついくぐり 平家「下がる矢をば 但馬「跳り越え、 平家「向かつて来るをば 但馬「長刀で切つて落とす。 平家「敵も味方も見物す。 但馬「それよりしてこそ、矢切りの但馬とは言はれけれ。</p>
--------	---

<p>(C) 渡河</p>	<p>《平家は橋を渡ることができない。ちょうど今は五月雨の時期。水嵩が増している。しかも、川は急流である。落ちれば流されてしまう。命も危うい。ここは諦めて迂回しようかと話し合っているところに》ここに平家の侍、下野国の住人、足利又太郎忠綱が進み出て申し上げた。</p> <p>「これほどの川、我が足利を流れる利根川に比べれば大したことはない。敵を目の前にして尻込みは坂東武者の名折れ。続けや殿ばら」そう言って、川の中に真つ先に入っていった。三百余騎がこれに続く。</p> <p>シテ「忠綱。兵を。下知していはく。</p> <p>地謡「水の逆巻く所をば。岩ありと知るべし。</p> <p>弱き馬をば下手に立てゝ。強きに水を。防がせよ。</p> <p>流れん武者には弓弭を取らせ。互に力を合はすべしと。</p> <p>唯一人の。下知に依つて。さばかりの大河なれども一騎も流れず此方の岸に。をめいてあがれば味方の勢は。我ながら踏みもためず。半町ばかり。覚えずしさつて。切先を揃へて。こゝを最期と戦うたり。</p>
<p>(4) 敦盛</p>	<p>《頼みとする平清盛も亡くなった。それより後、平家一門は滅びの道を辿ることになる。</p> <p>平家滅亡に至る三つの合戦。最初の合戦は一ノ谷で行われた。一ノ谷は後ろに山、前に海。右にも左にも関を構えた天然の要害に、平家は安心しきっていた。しかし、後ろの山からの義経の奇襲があり、安徳天皇をはじめ、平家の一門は海に逃げて行った。</p> <p>平家の公達、敦盛も海に向かって馬を走らせた。しかし、安徳天皇の召される御座船も、そして兵たちの乗る兵船も、すでに遙か沖に遠ざかっていた。それでも敦盛は海の中に馬を乗り入れる。</p> <p>敦盛「せんかた波に駒をひかへ。あきれはてたる有様なり。かゝりける所に。</p> <p>地謡「かかりけるところに。うしろより。熊谷の次郎直実。のがさじと。追つ懸けたり。</p> <p>熊谷：あれは大將軍とこそ見参らせ候へ。かへさせ給へかへさせ給へ</p> <p>地謡「敦盛も。馬引き返し。波の打物ぬいて。二打三打は打つとぞ見えしが馬の上にて引つ組んで。波打際に。落ち重なつて。</p> <p>《熊谷次郎直実が、少年武将の首を斬ろうと兜を押しあおのけてみると、まだ十六七歳ほどの少年。薄化粧してお歯金黒もしている。熊谷の子、小次郎と同じほどの年。容顔まことに美麗なり。》</p>

	<p>熊谷「御身は誰ぞ。名乗らせ給へ。助け参らせん」 敦盛「汝がためにはよき敵ぞ。名乗らずとも首をとつて人に問へ。見知らうずるぞ」 熊谷「ああ助け参らせばや」 《この少年武将を助けようと思った熊谷。しかし、振り向くと、後ろから源氏の武将、土肥、梶原が五十騎ばかりで追って来る。熊谷は涙をはらはらと流す》 敦盛「ただ何さまにも、とうとう首をとれ」 《熊谷、泣く泣く首をぞ搔いてんげる。 それより熊谷は浮世を空しく思うようになった》 敦盛：人間 五十年 一緒：化天(げてん)の内をくらぶれば、 夢幻のごとくなり――。 一度(ひとたび)生(しょう)を受け 滅せぬ者の有るべきか。 是を菩提の種として 同じ蓮(はちす)の台(うてな)にて 弘誓(ぐぜい)の海を渡りけり 弘誓の海を渡りけり。 《これが機縁となり熊谷次郎直実は法然上人の元で出家し、蓮生法師となった》</p>
<p>《休憩》</p>	
<p>(5) 千手</p>	<p>《一ノ谷の合戦で生け捕られた平重衡。その人柄に引かれた源頼朝は、重衡を助けたいとすら思った。しかし過失とはいえ、重衡は奈良に火をかけ、多くの仏塔、仏像を焼いた仏敵。南都の僧侶に渡さなければならぬ。そして、渡せば命はないだろう。そんな重衡を慰めようと、千手という女性を遣わした》 小雨降りける夕つ方 よろず淋しかりける頃なれば、御慰めの為にとて 千手前がいみじくも、 琵琶・琴持たせて参りたる 「今日の雨中の夕べの空。御つれづれを慰めんと。樽を抱きて参りつつ。既に酒宴を始めんとす。いかに重衡。ひとつ聞き召され候へ。 出家の御暇の事聞かまほしうこそ候へ。 「その由頼朝殿に申して候へども。出家を許し申さん事。思ひも寄らずとこそ候ひつれ。</p>

	<p>最後の夜に重衡は、 勧むる酒に興も得ず、定めし心申しける 「我は出家も叶わぬ身にあれば、現世に残す思いなく、 ただ来世の便りこそ、明日なき身にぞ聞かせけれ」 千手答えて朗詠し、五常楽をぞ奏しける。</p> <p>《笙：五常楽》</p> <p>その時重衡申すよう。 ただいま奏し給うは五常楽よのう。我はこの世に望みなし。ただ来世 の便り、後生の楽をこそ聞かまほしけれと宣ひて。かたへの琵琶を抱 き上げ、撥音気高く、弾き給う</p> <p>《琵琶の合奏》</p> <p>シテ「あさまにやなりぬべき。 地「あさまにやなりなんと酒宴を止め給ふ御心のうちぞいたはしき。 シテ「千手も泣く泣く立ち出で。 地「なに中々の憂き契り。はやきぬぎぬに。引き離るゝ袖と袖とのつ ゆ涙。げに重衡の有様目もあてられぬ気色かな。目もあてられぬ気色 かな</p>
<p>(6) 経正</p>	<p>《一ノ谷の合戦では、敦盛の兄、経正も討たれて亡くなった。経正は 琵琶の名手。彼の菩提を弔うために、御室の御所では管弦講が開かれ た》</p> <p>《管弦講》</p> <p>本郷：われ経政が幽霊なるが。 御弔（おんとぶらひ）の有難さに。是まで現れ参りたり。 「亡者のためには何よりも。娑婆にて手馴れし青山の琵琶。 おのおの楽器を調へて。糸竹の手向けを進むれば。 本郷「亡者も立ち寄り灯火の影に。人には見えぬものながら。手向の 琵琶を調ぶれば。 安田「時しも頃は夜半楽。眠りを覚ますをりふしに。 本郷「不思議や晴れたる空かき曇り。俄かに降りくる雨の音。 安田「頻りに草木を払ひつゝ。時の調子もいかならん。 本郷「いや雨にてはなかりけり。あれ御覧ぜよ雲の端の。 安田「月に双びの岡の松の。葉風は吹き落ちて。村雨の如く音づれたり。 り。</p>

	<p>《琵琶の掛け合い》</p> <p>「面白やをりからなりけり大絃はそうそうとして。村雨の如しさて。小絃は切々として。私語に異ならず。」</p> <p>「さきに見えつる人影の。なほあらはるゝは経政か。</p> <p>本郷「あら恥かしや我が姿。はや人々に見えけるぞや。あの灯火を消し給へとよ。</p> <p>本郷「夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。あらしとともに灯火を吹き消して。くらまぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊のかげは失せにけり」</p>
<p>(7) 龍宮</p>	<p>一ノ谷の合戦のあと、屋島の合戦、壇ノ浦の合戦が続いた。壇ノ浦は静かな海であった。その時は平家が優勢だった。</p> <p>《琵琶：海》</p> <p>ところが急に流れが変わった。義経は船頭を射殺すことを命じ、平家の船はコントロールを失い、戦いの流れが変わった。源氏優勢の中、幼き帝、安徳天皇を始めとして、公達も女官も、みな海の中に身を投げた。</p> <p>《今ぞ知る 御裳濯川の流れには。波の底にも都ありとはと。》</p> <p>壇ノ浦で失われたのは平家の人々だけではなかった。三種の神器も海に没した。そのうち、ふたつは見つけることができたが、草薙の剣だけは海中深く没して、見つけることができなかった。</p> <p>剣を探すために、法皇は賀茂の大明神に七日の御参籠をされた。そして七日目に夢の告げを得た。壇浦に住む老松、若松と云ふ海士に仰せて探させよという告げであった。</p> <p>法皇は源義経を壇ノ浦に遣わし、兩名の海女を見つけさせ、海底を探索させた。海から上がった海女、老松がいう。</p> <p>金沢：怪しき子細ある所あり、凡夫の入るべき所にはあらず、如法經を書写して身にまどって、仏神力を以て入るべし</p> <p>そこで僧侶を集めて法華經を書写して海女に与えた。海人はお経をいただき、身にまどうて海に入った。</p> <p>が、一日一夜上がって来なかった。</p> <p>海女はもう死んだと思っていた翌日、日が高くなった頃、海から浮かび上がって来た。</p> <p>義経が事の仔細を尋ねようとすると海女がいう。</p>

金沢：私に申すべきことに非ず、帝の御前にて申すべし」
海女を御所に連れて行く。法皇が自ら問う。

金沢：老松畏まって申すには。我宝剣を尋ねんが為。この経巻をいただき。ねんごろに読誦す。やがて。経巻一卷身に添えて。
地謡「かの海底に飛び入れば。空は一つに雲の波。煙の波を凌ぎつゝ。
海漫々と分け入りて。直下と見れども底もなく。辺りも知らぬ
海底に。そも神変はいさ知らず。取り得ん事は不定なり。

金沢：かくて海底の宮、龍宮にいたる。
：いかに申すべきことの候。大日本国（だいにつぽんごく）の帝王の御使。これまで参りて候」

佐藤：紅の袴著たる女官二人出でていう。
「何事にて候ぞ」

金沢：宝剣の行方を尋ねんため、これまで参りて候」

佐藤：しばらく待ち候へ
やがて天地震動して、つめたき氷雨の降り来たり、大風吹きて波も立ち、ややあつて天則ち晴れぬ。

佐藤：此方へ来たり候へ

金沢：老松すなわち庭に進めば。
御簾を半ばに上がられたる中に大蛇あり。
この大蛇。剣を口にくはへ。七八歳の子どもを抱え。
眼（まなこ）は日月（じちげつ）の如く。口は朱をさせるが如く。
舌は紅（くれない）の袴を打ち振るに似たり。

佐藤：良きかな、日本（につぽん）の御使、帝に申すべし。
この宝剣は日本（につぽん）の帝（みかど）のものではない。
竜宮城の宝なり。
かつて我が王子、出雲国簸の川上にヤマタノオロチとなって、
人を呑む事多年なりしに、スサノオノミコトに退治せられ
この剣（つるぎ）を奪われた。
その後、幾たびか剣を取り返さんと思へども、叶はざるところ
にこのたび源平の戦を起して竜宮に返し取ったのだ。
いま口に含むるは即ちその宝剣なり。
懐ける子は先帝、安徳天皇なり。
平家の入道、太政大臣平清盛を始め、一門皆々ここにあり。
見よ！
そういつて、傍なる御簾を巻き上れば、平清盛を上座にすゑて、平家
の一門、気高き上臈、其の数並び居給へり。
みな音曲をぞなしにける。

●仏は常にいませども うつつならぬぞあはれなる
人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ

●遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生れけん
遊ぶ子供の声聞けば わが身さへこそゆるがるれ

●舞へ舞へ舞へや蝸牛 舞はねば馬や牛の子に
踏み破らせてむ蹴ゑさせてむ 踏み破らせてむ 蹴ゑさせてむ

●舞へ舞へ舞へや蝸牛 舞はねば馬や牛の子に
踏み破らせてむ蹴ゑさせてむ 踏み破らせてむ 蹴ゑさせてむ

《琵琶と尺八のソロ》

●祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。
娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理なり。
盛者必衰の理なり。